

ALSを生きる

京都・囀託殺人事件が
問い掛けること

妻の選択あれで良かった

ALSを患っていた金澤和江さんは2017年4月、広島市西区の自宅で亡くなった。59歳だった。10年3月の発症から7年間、自宅で療養を続けた。夫保俊さん(66)と二人娘の歩さん(35)が、闘病生活を支えた。

夫 保俊さん

笑顔のかわいい妻だった。しつかり者で、何でも一人で決めた。自分の命のことさえも。「二人呼吸器は着けない。必死に生きる姿を見てきたから」。その選択を受け入れるしかなかった。「あれで良かったのか、いまだに分かりません」。保俊さんは仏前に座り、妻と歩んだ日々を振り返った。呼吸器を着けるかどうか。それは生きるか死ぬかを決めること。患者の約7割は着けないのが現実だ。それでも反対すべきか迷

⑤「呼吸器は着けない」決めた時



仏前で闘病の日々を振り返る保俊さん。和江さんが残した積みかけのセーターも手放せずにいる。(撮影・田中慎一)

「生きてえや」。苦しむ姿に言えなかった

こだま

庄原市無瀬 津秋利子 93歳

新型コロナウイルスの感染を警戒して「巣こもり」している。それでも通院や用事があれば、外出しなければならない。そのとき何より怖いのが自転車。前かがみになったり、重心が後ろから危うく衝突されそうになった。一度で二度ではない。

先日は、通院へ続く下り坂の歩道を歩いていても、何かが左肩をすくた。瞬間、何らかの衝撃もなく背後から自転車が目撃に飛び出した。

自転車が怖い

歩くはず、腰が震えて止まらないう。少しでも私が左に動いていたら、と想像して息が詰まった。自転車の人にしては、ベルが鳴らなかつたのかも、ベルが鳴らなかつたのかも、あれはない。あるいはブレーキが壊れて利かなくなつたのかも、それはない。そんな下りでも、な

可狭い歩道を好んで走るので、隣りの歩道には車の姿がなかった。猛スピードで走りかかっていく車影なのか若者なのかも判断できず男性の後

い抜いたのかね 和江 52歳のつかなれるのた。数程の病つた和「病告」告げかけた。年暮に「あれ」の連絡の告知を告げ、その門誌をみ込みに必死に取って茶販のと

かったのか

い抜いた。「思いを貫いた妻は幸せだったのかな。等々は一生、出ないでしようね」

和江さんが自らの異変を訴えたのは、52歳の時だった。「左手の小指が薬指につかない。顔を洗う時、手から水が溢れるの」。同居する妹さんに漏らしていた。数カ月後に受診した病院で「運動神経の病気」と告げられ、現役の看護師だった和江さんには見当が付いたらしく、「筋肉が落ちていく病気になった」と告げられたが、保健さんは実感が湧かなかった。根っからの仕事人間。2012年春に転職が決まり、山口県に単身赴任した。その留守中、和江さんの症状は一気に進んだ。「お母さんがまた転んだ」「ふれつが回ってこない」「妹さんからの連絡に焦りがこみ上げた。

その夏、家族3人で病院へ。ALSと告知され、保健さんは即決した。「介護を次の仕事にする。病気になんか負けるもんか」。和江さんは反対したが、8月17日、早期退職した。それからは必死だった。難病ケアの専門誌を取り寄せ、猛勉強。とりわけ、のみ込む力が衰えた妻に「食べなさい」とに必死になった。料理はシェキサーにかけて「茶」にして、お粥に溶かす。市販のよみ割を溶かす…。妻が胃の中の

造腹手術を受け、チューブで栄養を送れるようになって、口からも食べさせた。瘦せていく妻を見たくなかった。

しかし和江さんほどんどう弱っていく。「俺が見ろんだ」との思いも、なえそうになった。24時間、たん吸引やトイレ介助を要する。娘が仕事から帰るのを待って飯屋をとり、未明に交代する日々。自らの心臓病を抱え、疲れがたまるとはかりだった。いら立ちを抑えようと、トイレで何度も拳を握った。耐えられず、声を出さず口をきかされた。

「もう迷惑を掛けたくない」と思わせてしまったのか。妻はいっしょに、呼吸器は着けないうと、往診の医師に悪意表示するようになった。「おじいちゃんのために生きてあげ」。その言葉を何度ものみ込んだ。それは正しかった。昔、妻にのびに無理を強いてはいたのよ。

妻は長期、娘の腕の中で息を引き取った。「私の時間もあれから止まってしまった」と保健さん。毎週、納骨堂に足が向く。妻が残した服も靴も、何一つ捨てられない。介護殺人のニュースには心が波打つ。誰も責められなく、と思う。京都の事件の女性のことも。

新たに始めたことがある。妻がお世話になった病院でのボランティアだ。人生の大半を院内で過ごす難病患者に時折、草花を届ける。妻とつながっている気がする。

自身の行く末も決めた。自力で生活できなくなったら、施設に入るつもりだ。娘にはもう、自由に生きてほしいから。「それでええわねお母さん」。遺影の妻はうれしそうに笑っている。

■京都のALS患者囑託殺人事件とは

ALS患者の林優里さん(当時51)は昨秋、京都市のマンションで意識不明の状態で見つかり、病院で死亡が確認された。京都府警は今年7月、林さんの依頼を受けて薬物を投与し殺害したとして、囑託殺人容疑で医師2人を逮捕した。京都府警によれば、林さんは当時、間接的介護を受けていた。ブログでは「こんな家で生きたくはない」といり、生死は自分で決めたいという意思を何度も示していた。逮捕された医師の1人は会員制交流サイト(SNS)で安楽死と報

酬に関する投稿を繰り返して、林さんともやりとりしていた。130万円の金銭の授受もあった。

事件報道を受けて、インターネット上などで、女性への同情や安楽死を肯定する意見も相次いだ。一方、日本ALS協会は「医療倫理に背く行為で度外あつてはならない」というコメントを発表。協会として安楽死を認めない立場を示し「現在人工呼吸器を着けた重症患者でも外出や社会参加ができ、長期に生きる道が開かれている」と記した。

ALS患者囑託殺人事件の経過

- 2011年 6月 林優里さんが筋萎縮性側索硬化症(ALS)を発症
- 18年12月 2日 医師1人と林さんがツイッターで交流を開始
- 19年 1月3日 安楽死を求める林さんのツイートに「訴追されないならお手伝いしたいのですが」と返信
- 9月 2日 林さんが安楽死を求めて主治医に栄養補給の中止を要望
- 11月30日 京都市のマンションで意識不明の林さんが発見され、搬送先の病院で死亡確認
- 20年 7月23日 京都府警が囑託殺人の疑いで2人の医師を逮捕
- 8月13日 京都地検が囑託殺人の罪で起訴